令和元年度　人権作文講評（小学校の部）（応募総数 30 点）

○ 保護者との関わりを通して、自分を見つめ直し、これからの自らの生活の中で、実践していく意欲や決意が感じられる作品が見られた。
○ 「身近な」体験から人権について考えた作品は説得力があった。体験から人権問題を「自分ごと」として捉えている文章がありよかった。
○ 自分の体験を重ね合わせて、素直な気持ちで人権に関して考え、それを実際に行動に移そうと決意した作文が多かった。
○ 生活体験や学習等をきっかけに、深く掘り下げて考え始めている内容や不条理への気づきのある作品も見られよかった。
○ 児童が「温かいつながりの中で生きている」と感じさせられる作品が見られたのは大変よかった。
○ 推敲、言葉の厳選等よく指導されている。また、文量的にも極端に少ない作品がほとんどなく適切であった。

△ 作文の「始め」と「まとめ」の部分につながりが感じられないものがあった。
△ やや、内容が人権に対する同じものが多かった。このあたり難しい部分ではあるけれど。もっと型破り……と思われるような作品があっても良いのではないか。
△ 指導する側が、「人権」という言葉に、「気を使い過ぎている」という部分があるのではと思います（当然と言えば当然なのですが……意識しすぎでは……）。
△ 人権意識や人権感覚は、全ての生活場面で育まれるべきものという考えから見れば、もっとたくさんの題材や書くための視点があるのかもしれません（具体的な表現とならず申し訳ありません）。

【最優秀作品について】

作者は「人権作文って面倒くさい」という思いをもちながら、人権作文を書くことを通して、自分の日ごろの言動を振り返り、「知らず知らずの内に、誰かの人権を侵害しているのではないか？」ということに気付いた。その『気づき』から、自分なりにどうありたいか、どうすべきかを考えた文章で綴られている作品である。

これは「作者だけの問題なのでしょうか？」。作品全体から私たちにも「時には自分の人権感覚を振り返って！」と投げかけているように思われる作品でもある。この点、審査員全員からの高評価を得たところでもあった。

令和元年度　人権作文講評（中学校の部、高校の部）

（応募総数　中学校の部：12 点　高校の部：5 点）

《全体講評》

中学生高校生とも自分のことを素直に表現できている作品が多かったです。そこに、自分はどうしていくか、という部分が込められるとより深まると思います。

また、５枚という文量をしっかりと内容の繰り返しにならず、体験や考えを書き込むという点が課題となりました。

《中学校最優秀作品講評》

作者は外国にルーツのある友だちや視覚障がいのある友だちとの関わりやその友だちとの関わり方での失敗から自らを振り返ります。そこから自らが変わる必要性に気づきます。そして、差別をしない、見逃さない、許さないために５つの宣言を作ります。メッセージ性の高い作品です。

《高校最優秀作品講評》

作者は祖母の介護の中で素直に祖母のためにしてあげたいという思いになった自分に気づきます。誰に対しても変わらず接し、その人のために何ができるか考えられるようになったきっかけとなった祖母との毎日を振り返ります。介護をする中で得た温かさを感じる作品です。